

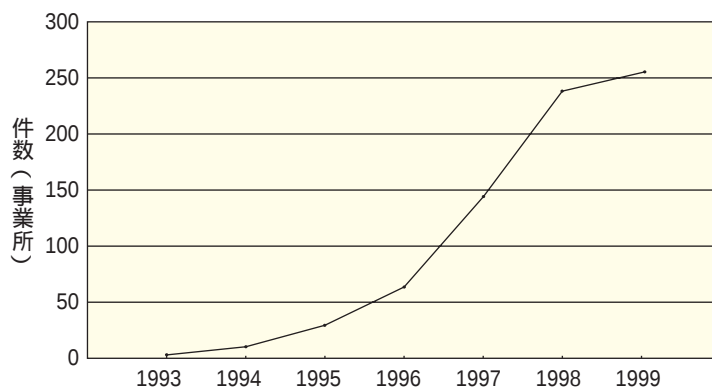
ISOに準拠したプロジェクト計画書

企業の情報システム部門が、システム開発プロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトを成功に導くためには、良いプロジェクト計画をいかに立案するかが重要である。ソフトウェア業界でも急速に広まりつつあるISO9001（国際標準化機構による品質保証規格）の観点から、プロジェクト計画書に何を書くべきかについて述べる。

ソフトウェア業界におけるISOの動向

日本のソフトウェア業界でISO9001品質システムが取り入れられてから5年以上が経過し、最近では急速に広まり続けている（図1参照）。

ソフトウェア業界でもISOが広がりつつある理由は、ソフトウェアの品質管理に非常に有効であり、ISOの観点から見ることで、本来あるべきプロセス（工程、作業）の欠落を発見したり、あるべき計画のものを発見することができる点にある。また、ISOの要求事項が、決して高度なことを要求しているのではなく、本来実施すべきことを要求している点にもある。



（出所）（財）日本適合性認定協会ホームページより（1999年2月末現在）

図1 ISO9000認証取得件数（情報技術分野）

プロジェクト計画書の記述上のポイント

ISOの観点から見て、プロジェクト計画を作成する際、有益である項目のうち、重要ポイントに絞って以下に述べる。

品質目標を立てる

プロジェクトの品質に関する目標を立てる。
Q（Quality：品質）、C（Cost：コスト）、D（Delivery Date：納期）の目標を含める。

体制を明確にする

プロジェクト内の責任と権限を明確にする。
「体制図」によって、プロジェクト内部と顧客との相互関係を明確にし、「役割」によってその責任と権限を明確にする。

また、スキルを持った人を割り当てるため、プロジェクトに必要なスキルを明確にする。

プロジェクトのインプットの対象を定義する

インプットは、以下を考慮する。

- ・契約内容の確認結果（提案書、企画書など）
- ・法規制上の要求事項（不明確な点や矛盾する要求事項は、顧客との間で解決しておくことが重要である）

プロジェクトのアウトプットの対象を定義する

すべての業務はプロセス（ここではシステム開発）によって達成される。すべてのプロセスには、インプットがあり、アウトプットはプロセスの結果である（図2参照）。アウトプットの定義が不明確だと、的の定まらないシステム開発を行うことになり、手戻りが発生する。そうならないためにも、アウトプットを明確に定義することが重要である。

なお、システム開発では工程の定義があり、工程別に要求（入力）や成果物を明確にする必要がある。システム開発のV字モデル（ソフトウェア開発のモデル）も考慮に入れる。

アウトプットの合否判定基準（物に対する合否判定基準）を定義する

あいまいな基準でアウトプットを作成するようでは、良い品質のシステムを構築できない。明確な合否判定基準を計画書に定めるか、手順書として作成する必要がある。実施段階では、合否判定基準にしたがってレビュー、テストを実施し、その内容を検証することが重要である。

フェーズ終了判定、リリース判定の計画を立てる

計画には以下を含める。

- ・ 予定時期、レビュー者
- ・ フェーズ終了判定、リリース判定の合否

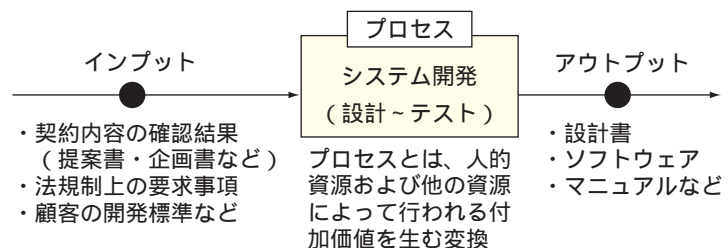


図2 ソフトウェア開発におけるインプット、アウトプット、プロセスの関係

判定基準（動作に対する合否判定基準）

次のフェーズに進むときやリリース（本番移行）を行うとき、あいまいな基準のもとに作業を進めるようでは、良い品質のシステムを構築し、リリースを確実に行うことはできない。明確な合否判定基準を計画書に定めておくか、手順書として作成する必要がある。実施段階では、フェーズ終了判定会議、リリース判定会議にて、プロジェクト責任者が合否判定基準にしたがって状況を確認し、合否を判定する。

この他にもISOを参考とすべき計画には、構成管理計画、協力会社管理計画、顧客支給品の管理、開発環境保全計画などがある。

開発担当者が、ISOを利用して良いプロジェクト計画書を作成し、それにしたがった活動を実施することは、顧客に安心感を与え、信頼感を高めることになる。結果として、プロジェクトをより成功に導くことにつながっていく。（野村総合研究所 石田芳昭）